

令和7年度(2025年度)

第1回熊本県社会教育委員会議の開催結果について

県社会教育課

1 日 時 令和7年(2025年)9月9日(火) 10:00~12:00

2 場 所 県庁本館5階 審議会室

3 出席者

- ・熊本県社会教育委員 12人(欠席2人)
- ・県社会教育課 福永課長 他10人

4 協議事項

- (1) 熊本県社会教育委員会議のテーマ「熊本県の社会教育・生涯学習について」
- (2) 社会教育関係団体補助金の交付についての報告 ※非公開

5 主な意見等

【事務局から】

- ・本会議では、熊本県の社会教育・生涯学習について議論・整理をするものとする。
- ・本テーマに係る経緯について説明。
- ・本年度の熊本県の社会教育や生涯学習の取組について、議論を深め、今後の県としての取り組む方向性について、様々なご意見をお聞きしたい。

【協議：熊本県の社会教育・生涯学習について(各委員から)】

- ・所属団体の活動で、学校がコロナ禍で体験活動等ができなかった時に、学校へ事業者の方々を連れて行き、体験活動を行ったことがあった。その活動について、当時関わった中学生が現在高校生になっており、当時の活動を振り返ると、当時とはまた見え方が違うので、学びというのは続けないといけないと言っていた。これが、本当の生涯学習ではないかと思う。また、家庭を支援する福祉との連携も必要ではないか。公民館等を活用して、学校に代わる子供の居場所や活動機会の提供を行っているが、子供たちには、活動して学ぶだけではなく学んだことを発表する場も必要だと感じている。
- ・天草市のコミュニティFMの中で、地域と学校をつなぐ地域学校協働活動についての番組を隔週木曜日に15分間放送している。地域と学校の連携に関わっている方々が出演しており、好評である。これまで、地域学校協働活動推進員や小中学校の校長、児童生徒や地域の農業漁業関係者、そして、

天草市長にも出演してもらった。それぞれの立場で話をしてもらっており、よい啓発活動になっている。

- ・夏休みに小学生の宿題のサポートをしたり、地域の子ども会の活動に参加したりして地域とのつながりができているところもある。また、高校生が学習したことを深化させる場面で、地域と連携しているところがある。例えば、家政科の生徒が製作した浴衣を自分で着付けするために地域人材を講師として派遣してもらったり、防災の観点から地域の管理栄養士の方に離乳食の防災食を実際に作りながら教えてもらったりしている。高校は、そういう経験をした生徒が、将来、生涯学習に関わっていくきっかけになる大切な時期や場所なのではないかと考えている。
- ・子ども会の事例では、それぞれの地域に、子ども会のジュニアリーダーとして活動している中学生や高校生がいる。特に夏休み中は、各地域でいろいろな活動の手伝いや企画・運営を行っている。ジュニアリーダーの研修会もあり、そこでの学びをさらに地域に還元するような活動もある。子ども会だけでなく、地域人材の中からリーダーを発掘して、皆でいろいろな活動を支えていけるとよいと思う。
- ・地域の公民館を使ったイベントは、保護者がついていなくても子どもたちが積極的に参加できるので、家庭にとっても非常にありがたいことだと感じている。PTA活動でも、地域学校協働活動推進員の方が、とても親身になって地域と学校と家庭をつなごうと一生懸命してくださっている。地域と家庭が前向きに、一緒にやろうという気持ちが感じられなければ続けられないと思うので、親としても、自分ごととして生涯学習や地域との連携を進めていくのが大事だと思った。
- ・幼稚園に通っている息子がいるが、コロナ禍の時期は、友達とも遊ばず、児童館や図書館の利用も制限されてコミュニケーションが取りにくかったので、地域との連携もあまりできなかった。現在は、園の行事等に地域の方が協力をしてくださることが多い。例えば、餅つきや芋ほりなどの活動や登下校時の地域の見守り等で、子どもにたくさん声をかけていただいている。また、保護者の研修等でも、地域の会場や駐車場を快く貸していただいたので助かった。そういった地域性やコミュニケーションに人の温かさを感じる。
- ・地域の公民館については、熊本県や熊本市では地域によって規模の差がある。自治会や地域婦人会の活動等も盛んな地域とそうでない地域がある。PTAも、PTA単独ではなかなか活動ができなくなったので、PTCAというふうに地域を入れた活動を始めたと聞いている。昔とは違ったやり方があるのかなというふうに思う。
- ・地域の公民館活動については、区長さんや公民館長さん等のリーダーの影響が大きいと思う。昔は地域の子どもたちが多く、子ども会活動で潮干狩りや遊園地等へ行ったり餅つき等の季節の行事をしたりしていた。保護者も役員も多く、手伝う大人が多かった。今は、公民館と子ども会で一緒に活動しても子どもや保護者が少なく、10人程度しか集まらない。また、地域人材も少なくなっており、定年延長で仕事をしている人もいる。地域を支える人が減り、地域が危機的状況であると感じている。だからこそ、社会教育や生涯学習を盛り上げて、地域と家庭が一緒になって子ども

たちを育てていかないといけないと思う。学校も家庭も地域も大変だが、あきらめずに地域で取組を進めていきたいと考えている。

- 熊本日日新聞で「PTA連絡簿改革編」という連載を不定期で掲載中である。記者が小学校PTA会長を4度務めた経験をもとに、会長のなり手不足、任意加入の課題、資金の使い方などを率直に綴っている。また、PTAに限らず、地域活動全般に共通する悩みを描いている。これまでの昭和、平成の常識が、令和では通用しなくなっている。現在の地域コミュニティ行政の仕組みは、1970年代に整備されたが、今もその昭和のルールが残っている。特に社会教育・児童教育・地域福祉などの分野で制度的な連携が難しく、行政や教育委員会による見直しが必要だと感じている。そういった活動にITを活用できないかという話も出てきている。「熊本昭和クラブ」という読者投稿企画では、90歳代の高齢者もメールで投稿しており、デジタルへの適応が進んでいる。誰一人取り残さない配慮は必要だが、ITは徐々に使いやすくなってきていると思う。
- 委員の皆さんの地域活動や意識の高い取り組みを踏まえ、地域に還元できる体制づくりが必要であると感じた。社会教育の環境整備の重要性を再認識したところである。現在、小学校のPTA会長として2年目、役員歴は7年目となるが、これまでに役員の会議出席率向上のため、柔軟な参加スタイルを提案し、出席率が約95%に向上した。PTA活動の一番の協力者である家族に対しても、家族で参加の忘年会を開催し、約110人が参加した。また、諸事情により謝恩会が中止となった卒業式に、PTAとして桜吹雪のサプライズ演出を企画し、地域の方々へ思いを伝えたところ、地域住民約200人が協力して卒業式に参加し、子どもたちへの温かい送り出しを実現することができた。みんなが幸せな気持ちになって、これが地域と学校が連携して子どもを育てる理想的な環境になるのではないかと感じた経験だった。
- 皆さんの話を聞いて、私も若い頃、水俣で初の女性PTA会長として活動していたことを思い出した。今は、主に高齢者を対象にする民生委員として活動している。現在、熊本市を除いて約2400人の民生委員がいて、皆元気に活動している。先週は札幌で全国大会があり、参加したが、最高齢の参加者は87歳で非常に元気で、周囲を驚かせていた。地域には多くの高齢者がいる。共働き家庭が増える中、地域の高齢者が子どもたちを見守る存在として重要であると思う。
- 生涯学習については、PTA活動の延長のように考えていたが、実際には非常に広い分野をカバーしていることを知った。私も、地域の公民館で20年以上朗読講座の講師を続けており、受講者とともに年1回の生涯学習フェスティバルで発表をしている。参加者は暑さや交通の不便にも関わらず積極的に参加している。また、女性コーラスグループに40年以上所属しており、来年で50周年を迎える。現在は、高齢者向けの歌を中心に活動しており、26名が参加している。最高齢は86歳で、以前は96歳のメンバーもいた。歌うことの素晴らしさを改めて感じている。今は楽譜を持って歌うスタイルで、皆が楽しく続けている。何かをやるということが、生涯学習につながっていくのだと思う。行政にも、福祉と連携して子どもを育てるべきだと訴えてきた。今後は、地域で子どもたちと音楽を通じてつながっていききたいと考えている。生涯学習の窓口は広いが、まだほんの一部しか通っていないと感じている。

- ・県の統括アドバイザーとして、地域と学校をつなぐ支援や助言を行っている。現在、地域の人々が学校に関わる活動は延べ20万人以上、保護者の学びに関わる人も延べ10万人ほどにのぼる。熊本県では、地域の人々が子どもたちと関わる取り組みが全国的にも非常に優れており、良い成果が出ていると感じている。
- ・天草の中学生が、地域の人との挨拶を通じてその大切さを学び、それを「社会を明るくする運動」で表した事例がある。さらに、友人との会話で環境の大切さにも気づき、地域のごみ拾いに参加するなど、地域の人々の姿から多くを学んでいる。こうした子どもたちが県内各地で育っているのは、地域の支援のおかげである。
- ・地域学校協働活動推進員、いわゆるコーディネーターの存在は非常に重要であり、今後もその活動を支えてほしい。また、教育委員会の充実も必要であり、福祉や高齢者との連携も含めて、地域学校協働活動の中でつなげていくことが大切である。今後とも引き続きの協力をお願いしたい。
- ・昨日まで、阿蘇青少年交流の家に大学生を連れて行っていたが、同じタイミングで小学生の団体も来ていた。彼らは元気いっぱい、他の団体との挨拶もきちんとしていて、横のつながりも感じられた。挨拶は地域との関わりへの入り口であり、やはり大事だと改めて思った。子どもたちには主体性が重要で、それを引き出すためには、大人が場を提供することが必要だと思う。年配の世代は積極的な人が多いが、中堅世代は仕事が忙しく、目立つことを避ける傾向がある。そういう人たちも、機会さえあれば参加するので、性格や傾向を見極めて、地域の窓口づくりを工夫することが大切だと感じた。

【座長のまとめ】

- ・社会教育・生涯学習の現状と課題が見えてきた。各団体が目的を持って活動しているが、参加者の固定化や減少が共通の課題である。新しい世代へのアプローチには、紙媒体だけでなくSNSなどの活用が必要だと考える。
- ・学びを個人で終わらせず、社会に還元する場をつくることも重要である。子どもや高校生、学校と公民館などがつながることで、学びの成果を発表する場が生まれる。社会教育は学校教育とは違う感動を伝えるものであり、それが地域づくり、人づくりにつながる。
- ・社会教育は空気のような存在で、止まったときにその大切さに気づくものだ。多くの人が社会教育という言葉を知らなくても、子ども会や廃品回収、公民館活動などを通じて実践している。実際に活動しているのは子ども会やPTA、青年団、婦人会などである。こうした団体が横につながり、情報交換する場として、このような会議は重要だと改めて感じた。